

御献茶の儀について

藪内家執事 石黒正勝

献茶とは、神前あるいは仏前に御茶を点てて供えることを云います。また天皇や門跡の御前に奉仕するのも献茶であります。

藪内の家元では、正保元年（1644）正月に本願寺門主に点初め献茶菓を奉仕し、今日までずっと続けられています。これは献茶としては一番長い歴史を持っているものでしょう。史実としてハッキリしていますのは、元禄十五年（1702）天満宮八〇〇年萬灯会に際して五代竹心が奉仕し手造茶碗を記念に奉



納していますのが知られています。当時の献茶式は神事でありましたから、本殿にて神官と奉仕家元だけの非公開での献茶であったことと思われる。その後も藪内家では北野天満宮にて二十五年ごとに家元が献茶を務めてきています。今日のように、公開の場で献茶式が執り行われるようになりましたのは、明治十一年北野天満宮半萬灯会の際、十代休々斎が案を交えて奉仕したのが初見であります。その後、各地の神社・仏閣にて公開の献茶が各流儀にて務められるようになったわけです。



ところで、県神社の献茶祭は太平洋戦争後の昭和二十七年頃から始められました。茶師による茶壺の口切り作法も先代竹風宗匠の指導の下改正統一され神前にて茶師の茶壺口切りと家元のお点前が同時進行する形で、公開の場で行われるようになったのです。この形式は他の神社



では見られない、県神社独特の献茶祭であります。茶所宇治県神社にて、十一月の五日に開催されますのは、誠に以て古来よりの茶壺口切りの時期に叶った献茶祭と言えましょう。

梵天渡御

梵天謀 謀長

谷口隆

梵天にたずさわって6年になります。たずさわるきっかけは、ジムの仲間が縣神社で梵天の担い手を募集しているということで、祭り好きの自分としてはすぐに仲間と一緒に参加することに決めました。

どうせ参加するなら梵天の制作からと竹の割込、長柄の取り付けにと参加してまいりました。梵天の担い手の習礼、いずれも初めての人達ばかりで、ちょっと心配でしたが、長老役員の方々の指導のもと、どうにか形になりました。そしていざ本番。梵天の巡行、暗闇での神移し、大幣殿前のぶん回し、縦振り、横振り、そして見物人の拍手喝采、力が余って梵天の竹が折れるハプニングもありましたが、無事に梵天を本殿に奉納できました。



それから6年間の間に、梵天の台座が傷んだりしたこともあります。年を

おう毎に、梵天、担い手共に進歩してまいりました。本当に楽しい祭りです。これからも、この縣神社の梵天祭りが、宇治市民の祭りとして、町衆と共に一体感のある祭りとし



て栄える事を、担い手の一人として願うものであります。又、梵天を担ってみたいと思われる方がいましたら是非参加の申し込みをお願い致します。



大幣神事を体験して

幣差 真田敦史

「わっしょい!!わっしょい!!」かけ声を合わせながら、厄災を封じた大幣を引きずり、県通りを一気に駆け抜けていきます。

予想していた以上に大幣が重く、上手く引きずれません。

そうしている間にも、後ろからは騎馬神人が私達を追いかけてきます。鳥居を抜けると先頭を走っていた私は、宇治橋商店街側に向かって大きく左斜めにロープを広げ、扇の形になるよう調整していきます。

鳥居から宇治橋までは緩やかなのぼり坂、「あかん・・・腰がガクガク

や。」もうこの時点で私の体力は限界を超えています。

最後の力をふりしぼり、宇治橋から宇治川めがけて大幣を投げ込み、大役を果たすことができました。



現在、宇治市では地域の風情、情緒、たずまいといった良好な環境を後世に継承するために定められた歴史まちづくり法を活用して、歴史・文化を活かしたまちづくりを目指し「歴史的風致維持向上計画」づくりを進めています。

この計画は、古来より受け継がれてきた歴史・文化、宇治茶の生産と茶に関わる様々な文化活動、伝統的な祭礼行事の継承など、こ



れら魅力ある宇治の歴史的風致を守り育て、未来へと引き継いでいくために作成されています。

この中で、大幣神事の歴史的風致として、「大幣神事は、宇治町衆による古式の疫神祭神事の様子を今によく伝え、宇治の古い街並みを巡行する大幣の様子は、中世をほうふつさせる風情がある。」と記載されています。

この歴史ある大幣神事に参加させていただいた貴重な体験を通して、このよき伝統・歴史を伝承していき、次代へと引き継いでいくことの大切さを学ぶことができました。

今後も、先輩の皆様のご指導をいただき、大幣座の一員として、しっかりと取り組んでいきたいと考えています。よろしくお願い致します。



涼風経緯 幡の会 辻田克己

建立が社中で確定したとき、肝腎の作品をどうするかが問題になった。高知本山町の第一句碑は「桜」だったがここはやはり宇治を讃える気持ちの新作がふさわしいということで、仲夏一日（平20）を宇治吟行とし、せっせと宇治を詠んだ。幸いこの句に共鳴多く、評価も悪くなかったので、

比較的に決めた。独ひとりよ善がりだけは慎しみたかった。

出生は伏見で幼時から近隣の名勝としてよく知っていたが、長じて鹿ヶ谷、西京極、聚楽廻、鳴滝と移るうち、宇治へ来てその景色が嵐山のそれに似ていることに気がついた。しかも三十幾年も住み馴れてみると嵐山のような威圧感がなくまろやかで控え目で優しげで、藤原時代に貴族が好んで別荘にした意味が分かる気がしてきたのである。

そんな明媚な宇治を、暑い夏日も、涼しい川風となつてくみそなわす遺物主的存在を思わずにはいられず、その思いを率直に表現したまでのことであった。

